

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

杉浦 ちなみ

【所属】(助成決定時)

東京大学大学院教育学研究科 博士課程

【研究題目】

奄美大島におけるしまうた文化の伝承プロセスに関する研究

【研究の目的】(400字程度)

近年、日本ではグローバル化、都市化、少子高齢化があいまって、各地で培われてきた地域文化の伝承が危ぶまれている。こうした問題に対し、現状の政策や先行研究では文化の「保護」や、経済的価値に注目した「活用」に主眼が置かれ、地域住民の日常生活の中で営まれる文化の価値は看過されてきた。一方で、地方創生が政策の中心課題に据えられる中で、社会の基盤を形作る「地域文化」の意味を改めて検討する必要がある。

本研究は、こうした課題意識のもと、鹿児島県奄美大島の地域文化であるしまうたの伝承活動の実態調査をとおして、以下の3点を明らかにすることを目的とする。①文化の伝承という営為がもつ人々にとっての意味。②生涯学習のシステムとしての文化伝承の実態究明。③文化多様性と持続可能な地域を育む教育のありかたの探究。

【研究の内容・方法】(800字程度)

第一に、文化伝承を扱う本研究における理論枠組みの前提として、「文化」および「伝承」の概念の位置付けを、文献調査を通じて検討する。第二に、奄美大島における文化伝承をめぐる制度史の調査を行う。戦後の近代化の中でしまうたは「遅れた文化」とされた時代もあったが、現在はしまうたコンクールや公民館講座など多様な取り組みがなされており、制度的位置づけには複雑な歴史がある。そうした制度の実態を、現地の資料調査から明らかにする。第三に、伝承活動の実態調査を、学校、社会教育、地域活動それぞれについて行う。

奄美大島では、地域での伝承活動が弱体化する地域も見られる中、学校でしまうたを学ぶことが伝承の機会になっており、学校が文化伝承の拠点となっている。しかし、以前は学校で共通語教育が奨励されるなど、地域文化の伝承が阻まれる時代もあった。それがいかなる変遷を辿って現代に至り、今どのような活動がなされているのかを、学校教員、地域住民へのインタビュー、授業観察などから明らかにする。

また、奄美大島では学校以外に、社会教育の領域でも、子供から大人までを対象にした様々なしまうた教室や講座などが開かれている。それがどのように計画、運営され現在に至っているのかを、公民館等の社会教育施設への訪問調査を通じて明らかにする。

さらに、しまうたは現在年間通して様々な地区行事で歌い、踊られている。これまでの調査から、地区内にはU・Iターン者もおり、行事への参加を通じてしまうたを学び、地域への理解や愛着を深めていく構造が明らかになってきた。これをより深めるべく、地区行事の参加者へのインタビューなどを通して、活動への参加の構造を明らかにする。

【結論・考察】(400字程度)

貴財団による研究助成を得て、以下が明らかになった。文献調査および現地訪問調査を通じて、第一に、文化の伝承という営みに教育学研究としてアプローチする際の基本的視点を得た。第二に、近世以前からの薩摩藩の郷中教育の歴史、そして戦後のカリキュラム改革の中での郷土教育が後押しして、学校教育に

において地域文化の伝承が重点化されるようになっていった。第三に、奄美大島では、各地の社会教育施設においてしまうた講座等の地域文化の伝承が行われ、現在も継続している（杉浦ちなみ「地域文化の伝承基盤としての社会教育—鹿児島県奄美大島のしまうた・八月踊りを事例に一」日本音楽教育学会第 48 回大会口頭発表、愛知教育大学、2017 年 10 月 21 日）。第四に、それと同時に自治公民館などを拠点に、行政が関与しない形で集落の自主的な活動としても文化伝承活動は行われている。このように、学校教育、社会教育、地域のそれぞれが関係し合いながら地域文化の伝承がなされている実態を調査することができた。今後はそれらの知見をまとめ、成果として発表していく。また、奄美大島の継続研究を行うとともに、本研究を通じて得られた視点をもとに各地の地域文化に関する研究を行う。